

---

# 僕と彼女と秋の空

けいじえ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕と彼女と秋の空

### 【Nコード】

N8856N

### 【作者名】

けいじえ

### 【あらすじ】

僕は彼女の何を知っているんだろう。僕は彼女に何を教えたんだろう。

## そのいち

学校が終わってから、僕達は街が一望できる公園まで来ていた。

秋独特の高い空。その中に広がる夕方の紅とそれに染められた雲の白。

それが見たかったのと・・・後は、大切な人と初めて過ごす秋を氣持よく始めたかったんだろう。

「わあ、綺麗・・・！」

「そうだね」

秋の色彩はいつも変わらないはずの僕達の街に違う感触を与えてくれている。

もちろん、僕の横にいる大切な人にも。

自然と手が彼女を包もうとする。

大した動作じゃないのに、胸が、高まるんだ。

僕の側に、引き寄せる。

僕の側に居て、と主張する。

「どうしたの？」

「・・・なんでもない」

どうしたの、って言った彼女の顔色までは逆光でこちらから伺えなかった。

少なくとも僕の顔は自分でわかるくらい真っ赤だ。

・・・恥ずかしいったらありやしない。

「もう秋だねえ・・・」

僕の恥ずかしさを、知ってか知らずか彼女は普段どおりに喋る。  
思ったことを思ったまま、彼女の言葉で。

「うん、最近どんどん寒くなってくるね」

「でも、それにしても薄着じゃない？」

「・・・うん」

そこまで言って彼女の思惑に気が付いた。全く・・・素直じゃない。  
言ってくれば、と思う時もある。でも、それを言わないのもかわ  
いいな、と思うんだ。

「・・・ねえ」

「なんだい？」

肩にかかる僕の手をゆっくりと降ろさせてこちらを真面目に見てく  
る。

「あなたは・・・私のことが好きなの？」

女の子ってのは告白だけじゃ伝わらないんだ、本当の気持ちってや  
つは。

だからこういう事をしたがる・・・気がする。

僕は女じゃないから分からないけど。  
思わず、ため息が出る。

「好きだよ、すごく」

「・・・じゃあ今のため息はなにっ」

「いや、君が可愛いなってさ。僕の前でだけでしょ？そういう可愛いとこ見せてくれるの」

「うっ・・・」

あんまり君がかわいいから、

「君こそ僕の事好きなの？」

苛めたくなるんだ。

「えっ、なんで？」

「だって、ほら・・・」

そこまで言ってから僕は彼女を後ろから抱きしめてやる。

「僕にこういうこととして欲しいのに言わないでしょ？わざわざ寒そうな服まで着てきてるのに鈍感、とか思ってるんじゃないの？君は素直なほうが可愛いよ？」

「はぁ・・・ばか・・・」

抱きしめた僕の手を自分の胸の前で、そっと握ってくれる君。その手は僕が知ってるよりずっと小さかった。

ああ、もっと君のことを知っていきたいよ、僕は。

---

「ねえねえ、太陽が沈むよ！」

真つ赤な太陽が山間に沈んでいく。街に夜が訪れようとしている。

「今は関係ないよ、ひとつ有るとすれば・・・」

「あるとすれば？」

「僕達の関係が沈まないようにしたいな、なんてね」  
「・・・うん」

あんまり上手くないよ、と君は笑った。

「そろそろ帰らないといけないね」

僕は彼女の手をとった。

彼女の小さな手を。

僕を愛してくれてる手を。

「ねえ・・・？」

「なに？」

「あ・・・なんでも・・・」

やれやれ、って台詞はこういう時に出るんだろうな。

僕は彼女の唇をゆっくりと奪う。

ぬくもりが唇から全身に伝わっていく感覚。

お互いの唇に触れるようなキスだった。

じんわり、と広がる喜び。それを相手と共感出来ている事を嬉しく思う。

ああ、僕は貴女に恋してる。

## そのいち（後書き）

読んでいただけたら幸いです。

それに

公園での出来事の後、僕は街に戻っていった。  
夜の帳は徐々に僕たちを包んでいく。

公園から僕はまだ一言も喋っていなかった。喋れなかったといつても間違いではないかもしれない。

まだ、キスの余韻が残ってたし、なによりも喋るとこの心地良い緊張感が崩れてしまうような気がしたから。  
ただ、その間握った手だけは離さなかった。伝わってくる温もりを独り占めにしたかったんだ。

街に近づくにつれ、喧騒が増えていく。

車の音は耳に響き、人々の声が僕達の間小さな隙間に入ってきてしまうようだ。

そんなことを考えていると、彼女が僕の長袖をくいと引っ張る。

「ねえ、駅だよ……」

「うん……」

僕はここから近い所に住んでいるが……彼女は、ここから電車にのって3駅ほどの所から学校に通っている。

彼女とはいつもここ——駅の階段の下で別れる。

彼女が、帰ってしまう。

そう思うと突然、別れることが寂しく感じてきた。  
もちろん、明日も学校だ。明日になればまた彼女に会える。  
なのに、それなのに。

なんだろう、この胸に穴があいてしまうような寂しさは。  
さっきまではこんな事なかったのに。

彼女は僕だけを、僕は彼女だけを見ていたのに。僕だけを見てくれる彼女は行ってしまっただ。

嫌だ・・・別れたくない・・・

「嫌だ・・・」

「えっ・・・？」

「今日だけは、今だけは別れたくないんだ・・・」

「そう・・・」

「お願い・・・お願いだから、もうしばらくでいいから、一緒に居てくれないかな・・・」

「うん・・・分かった」

まるで駄々をこねるように子供のようだ。

それでも、僕のこの寂しさを埋めてくれるならいいと思った。

とりあえず、ベンチにでも座ろ？

彼女の優しい言葉に僕は、頷くしか出来なかった。

「落ち着くまで一緒にいるよ、大丈夫だよ」

「うん・・・ありがと・・・」

僕の頭に彼女の手が触れる。

小さくて冷たかった手で僕を温めようとしてくれている。

一旦別れなければ、いけないということが分かると慰めの言葉も気持ちに染みこまなくなってしまうんだ。

そうすると、寂しさは僕をまとい僕だけを世界の中でひとりだけにしてしまうんだ。

ただただ、寂しさだけが僕を包んでいく。

「・・・ねえ、いちに?」

「なに」

つい声が冷たくなる。

「私さ、一緒にいようか?明日学校にいくまでの間ずっと。」

「えっ?」

「今、友達にケータイで連絡してみたら口裏合わせてくれるみたいだからさ。その・・・今日は君の家に行きたいな・・・もちろん、迷惑じゃなかったらだけどさ」

僕の頭は混乱していた。

彼女が?僕の家にな?来るだつて?

「だめ・・・かな?私、あなたの側に居てあげたいから。楽しい時はもちろんだけど辛い時だつて・・・それが好きってこと、じゃないかな」

彼女の言葉は僕に救いを与えてくれたんだ、本当に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8856n/>

---

僕と彼女と秋の空

2011年10月7日20時37分発行